

スポーツ競技中の消炎鎮痛剤の使用状況と医薬品適正使用に関する啓発の必要性

鈴木 紗希子¹⁾、船橋 美結²⁾、深澤 貴裕³⁾、市ノ渡 真史³⁾、前田 守⁴⁾、
長谷川 佳孝⁴⁾、月岡 良太⁴⁾、森澤 あずさ⁴⁾、大石 美也⁴⁾

- 1) 株式会社アインファーマシーズ アイン薬局 二本松店
- 2) 株式会社アインファーマシーズ アイン薬局 開成店
- 3) 株式会社アインファーマシーズ
- 4) 株式会社アインホールディングス

【目的】スポーツ競技中(以下、競技中)に消炎鎮痛剤(以下、鎮痛剤)を使用すると、NSAIDs での血流低下が腎臓や消化器に悪影響を及ぼす危険がある。しかし、一般用医薬品(以下、OTC)の鎮痛剤が容易に入手でき、競技中の鎮痛剤使用例が確認されている。そこで、マラソンを一例として競技中の医薬品使用実態を調査する。

【方法】2019年4月29日開催の郡山シティマラソンのスポーツファーマシストブースに来場した市民ランナー104名にアンケートを実施した。主な項目は「OTCの説明を受けた経験」「OTCの情報源」「OTCの副作用の認識」「競技中の鎮痛剤の使用経験」「競技中の鎮痛剤使用リスクの認識」とした。結果は、「OTCの副作用の認識」の有無で認知群と未認知群に分け、有意水準0.05としたカイ二乗検定とFisher正確確率検定で解析した。なお、本研究はアイングループ医療研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:AHD-0004)。

【結果】認知群(49名)と未認知群(55名)は、ともに男性(71.4%、70.9%)、30~49歳(57.1%、58.2%)、マラソン大会参加5回以上(53.1%、54.5%)が多かった。「OTCの説明を受けた経験」「薬局薬剤師をOTCの情報源とする割合」「競技中の鎮痛剤使用リスクの認識」は、認知群(36.7%、49.0%、40.8%)の方が未認知群(5.5%、25.5%、16.4%)よりも有意に高かった。競技中の鎮痛剤服用経験は、認知群(24.5%)と未認知群(25.5%)に有意差はなかった。

【考察】OTCの副作用への認知に薬局薬剤師の説明が貢献し、競技中に鎮痛剤使用リスクの認識にも寄与している可能性が示唆された。しかし、リスクの認識に寄らず4人に1人が競技中に鎮痛剤を使用している現状から、リスクの認識が適正使用に結びついていないことが考えられる。今後は、スポーツファーマシストとしての啓発活動を継続し、競技時の鎮痛薬の乱用とそれに伴う副作用発現を防止し、長期にわたって安全にスポーツを続けられるようサポートしていきたい。

(第13回日本薬局学会(2019年10月,神戸)にて発表)